

日本分析化学会 関東支部ニュース 第13号

2002年9月20日発行

発行者 (社)日本分析化学会関東支部

「支部事業への関東支部会員の皆様の積極的な御参加を 期待しています」

(社)日本分析化学会関東支部長
山梨大学教育人間科学部 山根 兵

今年は21世紀に入りましての第2歩目を踏み出した、やっと両足が新世紀に着地したともいえる年であります。数年前から21世紀の始めを記念するような関東支部としての新しい事業を企画検討しておりましたが、昨年度の関東支部「新世紀賞」の創設に続きまして、このたび「環境分析基礎講座」と称する新しい講習会を実施するはこびとなりました。これは日頃から分析業務に携わっておられる企業の実務者のうち、まだ分析実務経験の浅い初級者に対して、“分析とは何か”から始まって、試料の採取と取り扱い、分析化学実験の基本操作(器具の取り扱いを含む)分析の質の保証、分析データの処理やその精度管理、などの分析化学の基礎を教育訓練する場を提供しようというもので、これまでの講習会よりも実習に重点をおいたところが大きな特長でもあります。すでに実施されている関東支部主催の機器分析講習会や分析信頼性委員会主催の各種セミナーや講習会等を補完するものと考えております。

この新しく企画した講習会の他にも、これまで関東支部は、機器分析講習会(今年度で第43回と長い歴史があります)地方講演会など色々な事業を行っています。そのうち、東京シンポジウムは関東支部主催としては今年が最後となります。昨年度の支部ニュース(第12号)でも澤田前支部長から紹介がありましたように、来年度からは本部事業として更に発展していくものと期待されています。ちょうど、私が支部常任幹事であった年に東京シンポジウムの構想が持ち上がり、5年を年限として平成9年にスタートしたものが更に1年延長されたわけですが、その最終年に支部長として遭遇することになり感慨深いものがあります。東京シンポジウムの開催が企画されましたときには、ノーベル賞受賞者などの世界的に著名な学者をお招きしての特別講演を目玉にしようという壮大な構想がありました。この構想どおりに、これまでの東京シンポジウムで実施された特別講演には毎回多くの参加者があり大成功であったことは周知のとおりです。9月4～6日に開催された今年の第6回分析化学東京シンポジウム・2002 機器分析東京討論会(日本分析機器工業会の2002分析展と同時開催)の特別講演には文字どおりのノーベル賞受賞者の野依良治先生と、その分野の世界的な第一人者である中村修二先生を講師にお招きすることができ、お二人の歯に衣着せぬお言葉を交えながらの含蓄に富んだ素晴らしいご講演に大入り満員の聴衆が深い感銘をうけたことは記憶に新しく、後々まで語り継がれるような記念すべきシンポジウムとなりました。

話題がかわりますが、関東支部の今年度の会員数は個人会員約3200名、団体会員670ということで、ここ数年来、特筆すべきほどの大きな増減はなく、相変わらず日本分析化学会の7支部の中では一番多く、学会全体の個人会員の約半数が関東支部所属の会員ということになります。会員が多いということは専門的知識や能力、技術を身に付けた人を殆どあらゆる分野において確保、供給できるほど人材豊富ということでもあり、講習会をはじめ、何らかのイベントを企

画するときには人材に事欠かないという利点があります。一方では会員数が増えれば増えるほど会員同志の意志疎通がうまく行かなくなったり、支部行事に関与し、あるいは参加する人の割合は相対的に低くなりがちで、支部会員としての存在感をどの程度お持ちなのか疑問が残るところでもあります。支部活動の活性化や支部会員相互のコミュニケーションを図るために歴代の支部長や支部役員の方々が苦心し、努力して来られたわけですが、今年度もこれまでに築き上げられたものを継承しながら、さらなる発展充実を図り、また、会員の方々がより魅力を感じる学会、及び支部にするための方策を支部役員や会員の皆様と議論しながら探っていきたいと考えております。皆様からのご意見やご協力をよろしく御願い申し上げる次第です。

特集「私の論文投稿」

- 若手分析化学者が論文投稿に想うこと -

「ワトソンとクリックが日本の若手研究者だったら？」

東京薬科大学 内田達也

私の勤務する大学では、学部1年生数名をゼミナール形式で指導する制度がある。週一回のゼミでは英語の論文、教科書などを半期で輪読することになっている。私のゼミでは、DNAの二重らせん構造を発見した科学者ワトソンの著書「The Double Helix」を輪読している。この本はワトソンとクリックがDNAの二重らせん構造を発見するまでの経過を信じられない素直さで語っており、ケンブリッジ大学を舞台に繰り広げられる人間模様が描かれている。自分を若いワトソンの立場において読むことによって、研究するにはどんな気持ちでやるのか、先輩や先生にはどんな態度をとるのか、今後の勉学・研究生活の参考にしてみようことを主旨としている。ところが、ゼミを振り返ってみると学生よりも私自身が熱くなっていることがある。学生時代に読んだ際には感じ得なかったものが、研究者として生きる今だからこそ感じるためであろう。このことを糸口に私が「論文投稿」に想うことを述べさせて頂く。

有名な話であるが、二重らせん構造を決定する上で必要不可欠であったX線回折の結果はワトソンとクリックによって得られたものではない。さらに、Nature誌に発表された論文において、X線回折の測定者は共著者ではなく、謝辞も掲載されていない。このことに関して学生時代の私は、「ワトソンとクリックはズルイ気がする」という単純な感想を持つだけであった。しかし、論文が研究者の業績として如何に重要かを十分に実感する今では、彼らのあまりの非情さに驚嘆すると同時に強い共感も覚える。一つの研究が成立するためには様々な要素が必要である。例えば、研究環境（資金、場所、設備を含む）、労働力、頭脳などである。もし、着想、アイデア、論理的解釈などを創出する「頭脳」こそが最も研究において重要であるという普遍的な定義があり、それが社会において許容されているのであれば、ワトソンとクリックは極めて正当であろう。一方、優秀な労働力や十分な研究環境が欠けていたら研究は成立しないので、これに貢献する人々も可能な限り共同研究者として、時には筆頭著者として称えられるべきという考え方もある。ワトソンやクリックが日本の教育機関に勤務する平均的な若手(中堅)研究者であったなら、おそらく後者を選択せざるを得なかったであろう。もっとも、そんな平凡な研究者であったなら生化学における20世紀最大の発見はなかったとも推測できる。来年のゼミでも、私はワトソンの著書に動揺してしまうのであろうか。

「私の論文投稿」 - 若手分析化学者が論文投稿に想うこと -

群馬大学 梅村知也

夜も8時を過ぎたころ、研究室の電話が鳴った。誰だろう？こんな時分の電話じゃろくな用事じゃないだろう、とためらいつつも受話器を取った。そこには聞き覚えのある久本さんの声があった。しかし、いつもは歯切れのよい口調の久本さんが、その日は咽の奥に何かつまっているかの様である。嫌な予感がしつつも何事かと恐る恐る伺ってみると、表題について執筆して欲しいとのこと。「なーんだ、そんなことか」と最近諦めのよくなってきた私は快く(!?)お引き受けすることにした。さて、ご配慮により比較的書きやすいテーマを頂いたわけだが、私にはまだ表題について語るに足る経験に乏しく、面白いエピソードなどないので先にお詫びしておく(ごめんなさい)。

まず、‘投稿論文とは何か’ということを考えてみた。自己(研究)アピールの場、世の中に貢献する(と思われる)技術の開発や発見に対して世間の評価を受ける場、情報を共有しあうための正式文書などがざっと頭に浮かんできた。また、業績主義が謳われる世知辛いご時世では、ポストを得たり昇進するための道具であり、研究費を稼ぐための財産であるという考え方もあるのかもしれない。いずれにせよ、これからの長い研究生活において、論文は喜びや時には悲しみを共有する相棒となろう。

さて、投稿論文となれば当然読み手が存在する。そして、その最初の読み手であろう Referee のコメントには、皆様いつも一喜一憂させられていることと思います。私は以前、Referee から次のような厳しい(?)コメントを頂戴したことがある。それは綴りの間違いさえ直せばOKという Accept の手紙の最後尾に(というか欄外の所に)“この研究を遂行するのに7人も必要だったのか”という趣旨の一文が添えられていたのである。Referee のおっしゃる通り、確かにその研究は人員を必要とするようなものではない。しかし、こっちにも事情がある。むむっ、どうしよう!? 研究とは関係のないお家事情を説明するわけにもいかない。結局、欄外ということで見て見ぬふりをさせていただいた。その後、論文は無事掲載されたので問題はなかったのだが、先の一文は、誰の研究かを明らかにすべきであるという Referee の強烈なメッセージであったのだと反省する機会となった。

話が飛び飛びで申し訳ないが、最後に、私が論文作成に際しただひとつだけ実践していることを述べて筆を置こうと思う。これは、ある先生に言われて共感したことなのだが、最近、「AやBについては研究されているがCについてはまだ誰もやっていない。だからCについて研究した」という論調のイントロをよく見かける。そのような論文に出くわしたとき、「Cは面白くないから誰もやらなかなっただけだろ」というツッコミを入れたいようなことがしばしばあった。それ以来、誰もやっていないからCをやるのではなく、Cはこんなにも面白いからCについて研究するというスタイルで論文を作成するように心がけている(当たり前のことですが・・・)。さて、そのつもりで書き出している投稿論文をさっき読み返してみたのですが、何とも思うように書けていない。今回、この執筆で投稿論文についてじっくり考える機会が与えられ、論文作成の奥深さ、難しさを改めて実感させられることとなった。

「論文投稿で気がかりなこと」

東京都立大学 下坂琢哉

たしか日本化学会の「化学と工業」誌が「ぶんせき」に、既発表の結果についての論文を投稿したらちゃんと却下になるかどうか、という記事が掲載されたことがあったと思う。もちろん、審査する方には事前に知らされていなかったが、めでたく(?)却下された、という内容だったと思う。その時の感想は、案外とちゃんと見ているのだな、というのと同時に、アメリカに長期出張していた時のことを思い出した。お世話になっていた研究室の教授に生体関連における分析手法についての論文の審査が来たのだが、その教授は生化学が専門(と私を試す意味も有ったか

も)なので、私に意見を求めてきた。その論文の内容はそれなりに良かったのだが、色々調べている内に、(ちょっと記憶があやふやなのだが)投稿論文の abstract と既に発表になっている論文の abstract がほとんど同じということを見つけてしまった。ただ、その既発表の論文自体は手に入らなかったため、結局白黒の決着をつけないまま、その旨のコメントをつけて返したのだが、そのようなことはどうやら私が想像するよりも多いらしく、その教授曰く「以前、同じ内容の論文を二つの雑誌に投稿してきた人がいたが、両方ともその審査が私のところに来たので、どちらの雑誌に掲載したいのか?というコメントをつけて返した」と、冗談交じりに話してくれたのが印象深かった。研究者を評価する場合、論文は重要な評価基準であり、また今後さらに成果主義になればよりいっそう論文により評価されることになるだろうから、今はやりの IT を取り入れて、論文の審査については十分なチェック機構が必要になって行くであろうし、そうならなければならないと思う。

さて、自分が投稿する時はどうであろうか。もちろん、二重投稿などはしないにしても、いつも気になることがある。それは、「データは本当に正しいのか?」である。学生を指導する立場になると、どうしても学生のデータを使って論文を書かなければならないときがある。もちろん多くの場合は何らデータに間違いは無いのであるが、経験の浅い学生のデータではちょっとしたことを見落としとして間違った結果を導いてしまうかもしれないし、もしかしたら、(あまりの苦しさに耐えかねて)学生がデータをねつ造しないと限らない。論文は、良い方にも悪い方にも評価されてしまうので、このようなことは非常に怖いので、できる限り学生と膝を突き合わせて実験・研究について話し合うようにし、データを補足する実験をしてもらうように心がけている。ただ、あまり疑心暗鬼になっていると、石橋をたたき割ることは無いにしても渡るのが遅くなるので、迅速性を取るか正確さを取るかの塩梅は難しい。たぶんこの様な職に就いている限りは悩み続けるのだろう。

第 25 回分析化学若手交流会報告

東京薬科大学 大槻さなえ

平成 14 年 7 月 5 - 7 日の 2 泊 3 日で標記交流会が福島県飯坂温泉 旅館清山で開催されました。25 回を記念する今回は、「産・官・学の連携」をテーマとして、東北分析科学技術交流会と同時開催という初の試みとなりました。

例年、宿泊施設の収容人数の関係上、参加人数は 100 名前後に限られていましたが、今回はホスト校である山形大学の水口先生のご尽力により、「参加人数無制限!・露天風呂付き温泉旅館」での開催となりました。参加人数は過去最大の 168 名(若手の会 148 名、東北分析科学技術交流会 20 名)で、盛大な会となりました。以下、時間を追って会の詳細をご報告いたします。

[7 月 5 日]午後 1 時から、分析若手研究者 7 名により、30 分ずつ講演が行われました。昨までは発表者は学生が中心でしたが、今回は若手教員、民間企業の研究者により発表が行われ、「勉強会」といった雰囲気の中、討論が進められました。夕食を兼ねた懇談会では「同じグループの者同士は固まらないこと」というルールのもと、それぞれが席につき、乾杯の合図とほぼ同時に参加者の自己紹介が始まりました。前半はみな比較的大人しく聞いている様子でしたが、後半になると、友好を深めた結果(?)自己紹介が聞こえなくなる程おおいに盛り上がっていました。懇談会後は指定された数部屋での 2 次会が開催されましたが、それでは飽きたらずに、旅館ロビーにおいて、温泉旅館ならではの浴衣を着た某先生が学生達を集め、「これだけは人に負けないというものを持て!!」と熱い演説をされていました。「これぞ若手の会!」と感じましたが、同時にその先生の浴衣の前がはだけていたために「人に負けないものというのは一体ナニを指すのか?」との思いが頭をよぎったことが印象的でした。

[7 月 6 日]前日の疲れを温泉で癒し、午前 8 時 50 分より基調講演が行われました。「産・官・学の連携」というテーマに沿って、東北大学大学院 大類 洋先生「有機合成化学から分析化学

へ(新しい分析試薬・分析法の開発) - 思いつくままに - 」、理学電機株式会社 岸 證先生「X線回折・DSC同時測定装置 XRD-DSC 」、産業技術総合研究所 田尾博明先生「研究生活 20 年・来し方、行く末」の三件の講演が行われました。普段の学会では聞くことの出来ない研究の先輩方の研究に対するフィロソフィーに触れることができ、私も含め若手研究者にとって良い刺激となりました。午後4時からは学生によるポスター発表(25件)が行われ、学生同士が熱心に討論する姿がありました。懇親会ではポスター賞が発表され、「ポスターが見やすかったで賞」「夢があるで賞」等の表彰が行われました。最終的には発表者全員が受賞者となり、それぞれに粗品が送られました。(鬼のお面や象形のじょうろなど・・・本当の意味での「粗品」とはこういうものかと思った方は多いはずです。)

[7月7日]一般参加の企業の方により、午前中に三件の講演が行われました。「企業の研究というのは・・・」といった、昨夜のエタノールがまだ体内に残っているのでは?と思われるような本音も垣間見られる生き生きとした講演が行われました。記念撮影を最後に、三日間のプログラムが無事に終了しました。

若手の会の終了後、「知り合った人から沢山メールが届いたんですよ!」と喜ぶ学生の様子を見て、有意義な三日間であったと再認識することができました。

最後に、本開催にあたり、お世話いただいた山形大学の遠藤先生、水口先生、学生のみなさまに厚くお礼申し上げます。

第43回機器分析講習会

東京薬科大学生命科学部 藤原祺多夫

第1コース(ICP発光分析・ICP質量分析の基礎と実際)は6月6~7日に島津製作所東京カスタマーサポートセンター(秦野市)で行われた。昨年まではセイコーインスツルメントで行われていたので、本年は目先を変えて島津製作所をお願いした。スペースの関係で43名(うち講義のみ4名)と昨年よりは参加者は減少したが、盛会のうちに終了した。この機会に昨年まで続けてこられたセイコーインスツルメンツ株式会社に謝意を表したい。第2コース(有機化合物の構造解析のこつ - NMR, MS, FT-IRを使った誰にでもわかる構造解析の実際 -)は、7月3~5日に日本電子(昭島市)で行われた。参加者は54名(うち講義のみ10名)であった。タイトルを工夫したせいか、工学系の方々が講習者に多かった。第3コース(高速液体クロマトグラフィーの基礎と実際 - 環境・バイオの最新の話を含めて -)は、7月16~18日東京理科大学神楽坂キャンパス(東京都新宿区)で行われた。当初受講申込者が少なく苦戦したが、何とか53名の参加者(うち講義のみ12名)となった。受講者集めに苦労した原因としては、分析化学基礎セミナーなど講習会が重なったためではないかと考えられる。第3コースについては来年度は、さらに工夫する必要があるかもしれない。なお講義などのプログラムの詳細はぶんせき誌4号M22ページに掲載されている。

第1コース: ICP 発光分析・ICP 質量分析の基礎と応用

(株)島津総合分析試験センター 組成分析部 橋本 晋

平成14年6月6日(木)、7日(金)の2日間、神奈川県秦野市の島津製作所 東京カスタマーサポートセンターにおいて開催された。コーディネータである金井氏(産業技術総合研究所)の挨拶から始まり、講師の先生方により、初日に講義、2日目には実際のICP-AES、ICP-MSを用いた実習が行われた。初日の午後には、高田芳矩関東支部副支部長からの挨拶、また現在の分析を取り巻く環境、分析実務者に求められる事項について話をされた。

本講習会の内容は以下(敬称略)

講義

測定原理と最近の動向 (ICP 発光分析・ICP 質量分析)

(産業技術総合研究所) 田尾博明

半導体・セラミックスの分析 ((株)テルム環境エンジニアリング) 岡田 章

環境・生体試料の分析 (東大院新領域創成科学) 吉永 淳

超純水の分析 (オルガノ(株)総合研究所) 梅香明子

食品の分析 (食品総合研究所) 進藤久美子

実習

前処理技術

血清・底質など環境試料分析の実際について修得する (東大院新領域創成科学) 吉永 淳

半導体・セラミックスなどの分解・濃縮技術や超音波ネブライザー、LC-ICP-MS などの最新の試料導入法を修得する。(産業技術総合研究所) 田尾博明

ICPによる環境・食品試料分析の実際 ICP装置を用いて、河川水や食品試料中の元素を分析する。(食品総合研究所) 進藤久美子

ICP-MSによる高純度・環境試料分析の実際 超純水・半導体など高純度物質の超微量分析をICP-MS装置を用いて行う。

(オルガノ総合研究所) 梅香明子・(テルム環境エンジニアリング本部) 岡田章

実習では、島津のICP技術者が各グループにそれぞれ一名付き、実習補助を行なった。試料の前処理は、吉永氏が土壌の分解方法、田尾氏がカラムを用いた抽出・濃縮方法を自習された。前処理は、多くの分析者が苦労していることのひとつでもあり、参加者の多くが、講師による“職人技”、“秘訣”を盗もうと真剣に受講されていた。進藤氏による実習は、干渉などICPにおける問題点の提起から始まり、正しい分析値を得るための方法、注意点をわかりやすく解説されていた。近年は微量濃度における分析精度の向上が求められているが、岡田、梅香 両氏によるICP-MSの実習は、装置における測定のみならず、汚染対策についても多く触れられており、大変参考となった。

受講者は初日が42名、2日目が39名と昨年同様、盛況であった。実習では受講者が日常業務で実践している立場からの具体的な質問も多くあり、熱心な質疑応答が行われ、有意義な講習会であった。

また講習会終了後には講義・実習受講者全員に受講証が授与され、2日間の日程を終えた。

本講習会が大盛況のうちに終了したこと、コーディネータの金井氏、各講師の先生方の労に感謝致します。

第2コース 「有機化合物の構造解析のコツ」

東京税関 佐藤 宗衛

表題の講習会が、7月3日(水)~5日(金)の3日間、日本電子(株)において、全国の主に化学系企業、大学関係者等からの受講者56名(内講義のみ受講者10名)の参加を得て開催された。

本講習会は、本年度で43回目を迎えるが、実施された足跡を見ると機器分析の発展を反映しているように思われる。現在、講師の一人を担当させてもらっている筆者もかつて、湿式分析法から機器分析が広く導入されようとしている時期(約30年近く前)に、本講習会の「機器による構造解析の基礎と実際」を受講しており、本講習会がその後の有機分析担当者になるのに非常に有意義であったと実感している。その当時の構造解析法も、IR法、MS法、NMR法のいわゆる3種の神器であり、これは、その後装置の高性能化や複合化(GC-MS、LC-IR等)などが図られている今日においても基本的に変わっていない。

本講習会は、先ず初日に、有機分析の全体の概要と各分析装置の位置付けの説明が行われた後、各論となる前処理法・分離、IR、MS、NMR並びに今回から取り入れられたデータベースの

利用法について、それぞれの専門かつ実務経験の豊富な先生方から教材に沿って講義が行われた。2日目及び3日目には下記の5つの実習コースに従って1グループ8名～10名程度の受講者毎に実務に精通した講師により実習が行われた。

FT-IRの測定と解析、GC-MSの測定と解析、LC-MSによる精密質量測定と解析、NMR測定(LC-NMR測定を含む) NMR解析演習～有機化合物の構造決定が行われた後、総合討論として各講師陣による総合解析と参加者との質疑応答

実習は、日本電子(株)からの分析装置の協力を得て行われた。2日目の実習後には、受講者の大多数の参加を得て、講師との意見交換会も行われ、実習と共に日常の分析業務や問題点の解決についての情報交換も行われ有意義のようであった。

最終日の総合討論では、グループ毎に実習で測定したデータを、講義及び実習を通じて与えられた情報と関連データを基に出来る限り詳細に解析して、相互に矛盾しない化学構造を決定し、代表者が発表した。このプログラムを通じて、受講者全員の理解度が深まったと考えられる。

分析は対象となる試料の性状(混合されている組成や状態) 分析目的(各成分の同定、対象となる成分の定量、状態分析)等により、選択する測定方法(分析装置)及び得られる情報の質・種類やその深度が異なることは当然である。従って、各分析装置は万能ではないので、得意とする点と不得意な点を良く理解して、適切に選択するとともに相補的に利用すべきである。要は基礎的な解析手法の知識を一通り身に付けたり、後はできるだけ多くの種類の化合物の測定と解析(単純な単一の化合物から次第に複雑な組成よりなる試料)を経験することであろう。近年は、構造解析用の優れたデータベースやプログラム(ソフト)が提供されており、解析の効率化及び迅速化のために大いに利用すべきと考えるが、正しい結論を導くには、過度に信頼することなく、結果が正しいかどうかを見極める解析能力をしっかりと身に付けておくことが肝要である。

多くの受講者から、「一部のスペクトルの解析は難しいこともあったが、未知化合物の構造解析手順の理解が深まり、自ら解析できるようになった喜びとともに自信が得られた」との声も聞かれた。

受講者の皆さんが本講習会で得られた知識や解析技法を今後の業務に大いに活用されることを期待している。

第3コース「高速液体クロマトグラフィーの基礎と実際」

日大生産工学部 渋川雅美

第3コース「高速液体クロマトグラフィーの基礎と実際《環境・バイオの最新の話を含めて》」は、7月16日～18日の3日間、東京理科大学で開催されました。初日の台風が続いて、翌日からは猛暑に見舞われましたが、それにもかかわらず、受講生の皆さんには3日間とも熱心に参加していただきました。本コースは、中村洋先生のお世話で東京理科大学の校舎をお借りして行うようになって、既に8年になります。講師陣はその間大幅な変更はなく、今年度も中村洋(東理大薬)、岩岡貞樹(三共)、西川隆(共立薬大)、二村典行(北里大薬)、星野忠夫(病態解析研)、土屋正彦(横国大工)の各先生と筆者(日大生産工)が担当しました。また実習は、中村、西川の両先生と伊藤伸也氏(日立ハイテクノロジーズ)および筆者ならびに島津製作所、日立ハイテクノロジーズ、東ソー、日本分光、日本ダイオネクス、ユニフレックス、ジーエルサイエンスの各社の実習指導員の方々により、「分離系の設定と実際」、「検出系の設定と実際」、「試料の前処理からデータ解析までの実際」、「LC/MSの使い方と環境ホルモン分析」の4テーマを、それぞれ3時間ずつで行われました。

今年度の受講者数は昨年とほぼ同数の54名(講義のみの12名を含む)でしたが、これには学生が7名含まれており、残念ながら受講者が若干減少したことは否めないようです(分析化学会主催の他のセミナーの影響が指摘されています)。今回目立ったことの一つは、従来の製薬、食品、環境分析関連の企業からの参加者に加えて、人材派遣会社に登録されている方が参加されたことです。すでに分析業務についている方もおられましたが、まだ、派遣先が決まっていないの

に勉強にこられた方もありました。分析関連の職種に就くための道の一つとして派遣社員というかたちは定着しつつあり、今後機器分析講習会がこれまでとは違った重要性をもつようになる可能性がありそうです。

講習の最後に行われた総合討論では、多くの最新の機器に触れることができ、非常に役に立ったという感想の一方で、講義の内容が多すぎて消化不良であった、実際に参加者自らが実験を行う形の実習にしてほしかったなどの指摘もありました。講師ならびに指導員一同、今後も可能なところから改善を試みていきたいと考えております。

第 6 回分析化学東京シンポジウムポスター賞

第 6 回分析化学東京シンポジウムでは、昨年に引き続き、優秀なポスター発表に対してポスター賞(金賞・銀賞)を授与致しました。受賞された方は以下の通りです。おめでとうございます。また、副賞を提供して頂きました(社)日本分析機器工業会に深くお礼申し上げます。

ポスター賞 金賞

環境水中の重金属元素の分離・検出・スペシエーション(1P59)

(群馬大工)板橋英之、浅野 比、川本 博

超高倍率濃縮分離システム“TRICOM”の開発と革新的環境分析(2P39)

(茨城大工)秋山亮太郎、高貝慶隆、五十嵐淑郎

ポスター賞 銀賞

ポリマー濃縮/ETV-ICP-MSによる河川水中微量元素の定量(1P42)

(名大院工)田中智一、安藤善昭、齋藤 徹、平出正孝

天然水中の微量金属の化学種分析を中心とする環境分析化学研究室の紹介(1P54)

(宇都宮大工)清水得夫、藤江玲頼、北村和範、上原伸夫

環境試料中の微量元素の定量(2P55)

(日女大理)藤田圭子、今泉幸子、蟻川芳子

環境水中のトリチウム濃縮技術の新手法(2P56)

(新潟保健環境科学研)川田邦明、田辺顕子、家合浩明、小林 正

編集後記

さっぱりよくわかっていないまま編集委員の大役を仰せつかってしまいましたが、今、やっと無事に編集後記までたどりつくことができました。これも皆様のご協力の賜物と感謝しております。

今回は第 6 回分析化学東京シンポジウム・2002 機器分析東京討論会において聴衆を魅了した中村先生の特別講演を再現して掲載しました。先生のすばらしいご講演を伺った時の、会場の聴衆の感銘が少しでもお伝えできましたでしょうか。掲載をご許可頂きましたこと、厚くお礼申し上げます。

「特集テーマ」では、月並みではありますが、若手分析化学者の論文投稿への想いを語っていただくことにしました。いつの時代も論文投稿は大学研究者の評価に直結するものであり、ひいては日本の研究のアクティビティーを世界に知らしめるためにも重要な課題です。執筆をお引き受けくださった気鋭の若手研究者それぞれの秘めた想い(?)を感じ取って頂ければ幸いと存じます。

最後になりますが、お忙しい中、無理なお願いを聞いていただきました執筆者の諸先生方に厚くお礼申し上げます。

2002年度編集委員：久本秀明(東京大学院工学系研究科)
西本右子(神奈川大学理学部)